

# 病院風景

寺田寅彦

青空文庫



東京××大学医学部附属病院、整形外科病室第N号室。薄暗い廊下のドアを開けて、室へはいると世の中が明るい。南向きの高い四つの窓から、東京の空の光がいつぱいに流れ込む。やや煤<sup>すす</sup>けた白い壁。婦人雑誌の巻頭挿画らしい色刷の絵が一枚貼つてある。ベッドが八つ。それがいろいろの様式がちがう。窓の下に一列のスチームヒーター。色々の手拭やタオルの洗濯したのがその上に干し並べてある。それらがみんな吸えるだけの熱量を吸つて温かそうにふくれ上がっている。

コキコキ。コキコキ。コキコキコキツ。

ブリキを火箸でたたくような音が、こういうリズムで、アレグレットのテンポで、単調に繰返される。兎<sup>みつくち</sup>唇の手術のために入院している幼児の枕元の薬瓶台の上で、おもちゃのピエローがブリキの太鼓を叩いている。

ブルルル。ブルルル。ブルブルブルツ。

窓の下から三間<sup>げん</sup>とはなれぬ往来で、森田屋の病院御用自動車<sup>あずきいろ</sup>が爆鳴する。小豆色のセーターを着た助手が、水道のホーズから村山貯水池の水を惜気<sup>おしげ</sup>もなく注いで、寝台自動車を冷たい行水を使わしている。流れた水が、灰色のアスファルトの道路に黒くくつきりと

雲の絵をかいている。

またある日。

窓の下の森田屋の前で、運転手と助手とが羽根をついている。十くらの女の子も二人でついている。子供の方が大人より上手である。若い丸鬚まるまげの下町式マダムが弁慶縞の上つぱりで、和装令嬢式近代娘を相手に、あでやかにつややかに活躍している。

またある日。

糸のような雨が白い空から降る。右手の車庫のトタン屋根に雀が二羽、一羽がちよんちよんと横飛びをして他の一羽に近よる。ミーラヤ、ラドナーヤとでも囁ささやっているのか。相手は逃げて向うの電柱の頂へ止まる。追いかけてその下の電線へ止まる。頂上のはじつとして動かない。下のは絶えず右に左にからだを振り動かしている。いつまでも動かしている。

その電柱の辺に、学生時代のクラスメートTMの家がある。彼は今はW大学の数学の先生である。三十年前にはよくTMと一緒に本郷、神田、下谷したやと連立つれだって歩いた。壱岐いぎ殿坂のぞか教会で海老名えびな弾正だんしょうの説教を聞いた。池いけの端はたのミルクホールで物質とエネルギーと神とを論じた。

TMの家の前が加賀様の盲長屋めくらながやである。震災に焼けなかったお蔭で、ぼろぼろにはな  
 ったが、昔の姿の名残を止めている。ここの屋根の下に賄いまかなの小川の食堂があつて、谷中やなか  
 のお寺に下宿していた学生時代に、時々昼食を食いに行つた。オムレツと焼玉子の合の子  
 のようなものが、メニューの中にあつた。「味つき」と「味なし」と二通りあつた。「才  
 イ、味なし」。「味つき」。そういうどら声があちらこちらに聞こえた。今は雑使婦か何  
 かの宿舎になつていらしい。そのボロボロの長屋に柿色や萌黄の蛇じやの目の傘めが出入りし  
 ている。

またある日。

蒲団を積んだ手荷車が盲長屋の裏を向うへ、ゆるやかな坂を向うへ上つて行く。貸夜具  
 屋が病院からの電話で持込むところと想定してみる。突当りを右へ廻れば病院の門である。  
 しかし車は突当りまで行つて止つた。その曲り角の処で荷物をほごしている。曲り角に  
 は家はないはずである。分からない。どう考えてもこの蒲団の行方は分からない。余所の  
 蒲団の行先は分からない。

この角の向側に牛肉屋の豊国とよくにがある。学生の頃の最大のラキジュリーは豊国の牛ぎゆうな  
 鍋べであつた。色々の集会もここであつた。天文関係の人が寄つたときにその頃発見され

た新星ノヴァ・ペルセイの話が出た。新星と豊国がその時から結合した。磁力測量に使う磁石棒の長さをミクロンまで精密に測ろうとして骨折った頃にもよく豊国の牛肉を食った。磁石と豊国とがその時から結合した。

解剖学のO教授もよくこの昼食を食いに来ていた。ドイツ生れのO夫人がちやんと時刻をたがえずやって来て一つの鍋のロースを日本の箸ではさんでいた。三十余年前にはこれが珍しかった。

ある夜。

岩崎の森の梢に松坂屋の照明が見える。寒い暗い都会霧の中に夢のワルハラのごとく光の宮を浮上がらせる。

上野の動物園の森で一度に鳴き出す色々の鳥類のけたたましい声が聞こえる。

廊下から中央階段を降りようとする途中で窓越しに東を見ると、地下鉄ビルの照明が見える。サッポロビールの活動照明、ビール罫の中から光の噴泉が花火のようにほとば迸る。

靴が見えない。玄関の隅々をのぞき廻る。「××さん、靴はあちらですよ」。白い制服を脱いだ看護婦達はやはり女性である。

またある日。

廊下の突当りの流し。タップをひねれば、いつでも湯が出る。一つコックの工合の悪いのがあって、それから湯が不断に流出している。もったいない、と知らぬおばさんが云う。暖かい湯気が立上がる。しおれた白百合やカーネーションが流しの隅に捨ててある。百合の匂。カーネーションの匂。洗濯する人。お化粧する人。

小使が流しの上へ上がって、長い棒を押し立てて、何かゴボゴボ音を立てている。棒の先にゴムの腕のようなものが取付けてある。この腕を流し口の穴の上に俯向きうつむに当てる。押したり放したり押ししたりまた放したりする。流し口の穴のつまったのをこうして疎通させる工夫と見える。流しの鉛管をつまらせる事は日本人の特長であるらしい。

看護婦が手押車に手術器械薬品をのせたのを押しに行く。西日が窓越しに看護婦の白衣と車の上のニツケルに直射する。見る目が痛い。手術される人はそれがなお痛いことであろう。

病院で手術した患者の血や、解剖学教室で屍体解剖したいをした学生の手洗水が、下水を通してしのばすのいけ不忍池しのばすのいけに流れ込み、その蓮根れんこんを肥やすのだと云うゴシップは、あれは嘘らしい。

廊下の束詰おの流しの上の明かり窓から病院の動物小屋が見える。白兔やモルモットらしいものが檻おの中に動くのが見える。これらの動物は、神経を切られたり、動脈へゴム管を

挿されたり、病菌を植付けられたり、耳にコールドタールを塗って癌腫がんしゅの見本を作られたりする。

谷を距へだてた上野の動物園の仲間と比べるとここのは死刑囚であろう。

動物をいびり殺した学士が博士になる。

殺される動物は、ほがらかな顔をしている。

またある日。

屋上へのぼる。階上に洗濯室が二つ。鼠色の制服を着た雑使婦の婆さんが洗濯している。どこかミレーの絵の鼠色の気分である。屋上の砂利の上に関東八州の青空。風が強くて干し物がいくつか砂利の上に落ちていている。清らかななまめかしい白足袋も一足落ちていている。北側の胸壁にもたれて見下ろす。巡査が一人道側へ立って警戒している。何の警戒が分かるぬ。しかし何かを警戒していることは分かる。

H首相が入院していた時の物々しい警戒を思い出す。悪いことをしないものは恐ろしくて通れなかった。

昔の医科大学の時計台もとくに無くなった。去年札幌へ行って、明治時代の時計台建築の遺物を見て涙が出そうな気がした。年を取ると涙腺の居すまいが変ると見える。



「鉄門」も塞がれた。鉄門という言葉は明治時代の隅田川のボートレースと土手の桜を思いつく。鉄門が無くなって、隅田堤がコンクリートで堅まれば、ボートレースの概念もやはり変って来る。明治の隅田川はもうなくなつた。ただの荒川下流になつた。

またある日。

本郷区役所がコンクリートの豆腐に変わった。隣りのからたち寺の樹立こだち、これだけは昔のままらしい。

電柱の雀がからたち寺へ飛んで行く。人間の世界は何もかも変って行くが、雀はおそらく千年前の雀と同じであろう。

またある日。

赤門からはいって行く。櫓けやきの並木をつつむ真昼の寒い霧。向うから幸福な二人連れが来てすれちがう。また向うからただ一人、洋紅色のコートを着た若い令嬢が俯向いたまま白いシヨールで口を蔽おほうて、ゆっくりゆっくり歩いて来る。血色のいい頬、その頬が涙で洗われている。

正月の休みで、外には誰も通る人がない。旧解剖学教室、生理学教室の廃墟には冬枯れの雑草ががらがらに干からびて衰れである。いかめしい城郭のようなライブラリーも柔ら

かで憂鬱な霧の薄絹に包まれている。

涙の女はゆっくりゆっくり図書館の方へ歩いて行く。しばらくして、もう一遍振り返って見ると、女は引返してまたこつちへゆっくりゆっくり歩いて来るらしい。可哀相に。

からだの怪我や片輪は、直るものなら病院で直してくれる。傷ついた心、不具な理性を直してくれる病院はないものか。昔はそれがあつた。それが近代の思想の嵐に倒潰した。そうしてこれに代わるべき新しい病院はまだ建たぬ。可愛相に。

病院も正月で静かである。病室は明るく温かい。窓の下では羽根をついている。今日も雀は居る。昨日の雀だかどうかは分からない。雀はどれを見ても人間には同じである。

(昭和八年四月『文学青年』)

# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第四巻」岩波書店

1985（昭和60）年11月5日第3刷発行

初出：「文学青年 創刊号」

1933（昭和8）年4月1日発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 病院風景

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>